

日本に遺存する目蓮説話の和讃と口説初探

吉 川 良 和

はしがき

地獄（餓鬼道）に堕ちた悪業の母を救済する「目連救母」の説話は、今日でも東アジアから東南アジアに、その痕跡を見出すことができる。この説話がお盆の縁起であるゆえ、仏教流布圏では連綿と受けつがれてきたともいえる。日本の中世には広く知られていたが、近代以降、日本人の脳裏から消え去りつつある。

中国大陸でも新中国成立直後、「目連劇」は最も迷信的な芝居として禁演に指定され、徐々に忘却されるようになった。それが、1980年代後半に至って、宗教研究が解禁になると、研究と上演が許され、目連劇国際研究会も催された。87年、安徽省祁門の研究会に出席した筆者は、以来、中国とその周辺だけでなく、わが国に遺存する目連関連資料や目連芸能の調査をも重ね、その成果を発表してきた¹⁾。日本に伝承する目連物に関しては、岩本裕氏の『目連伝説と盂蘭盆』（法蔵館 1968）が代表的で、川口久雄氏と石破洋氏には金沢に伝わる盆踊り唄などの紹介・論述がある²⁾。そこで、本論ではこれまで、ほとんど論及されなかった和讃と口説^{くどき}について述べてみたい。

和讃は梵音の梵讃や漢訳の漢讃に対して、和語の七五語調を基調とする詞章を演唱する。多くは仏・菩薩・経文・教義・祖師・先人の徳を称讃す

るものである。本来、声明に属していたが、信徒の奉詠する在家和讃などは、『盂蘭盆経和讃御詠歌』など、「御詠歌」の類も含まれる³⁾。平安中期に勃興した天台浄土教によってひろまり、鎌倉時代になると、信者に愛好され、新興の浄土真宗などが教勢を伸ばすために力を入れた。親鸞の和讃などが有名で、やがて他の教派も追随する。近代には俗謡化して、大衆の信徒により振鈴の伴奏で演唱される「御和讃」も生まれた。

一方、口説くどきは桃山時代に口説節が木遣り音頭に取り入れられて、17世紀半ばにはお盆おどりの「躍口説」が流行するようになった⁴⁾。物語を同じような旋律を繰り返して語るものである。北陸地方に今日でも流行する盆踊り唄『目蓮尊者地獄巡り』などは「躍口説」の一例である（注1の⑤と⑦）。長篇の叙事的な盆踊り唄で、当地では歌うといわず「語る」と称している。音頭取りが独唱し、踊り手は囃子ことばに唱和するかたちで進められる。詞型は四・三／三・四の七言形式が多いが、三・四・五の七五語調もある。話の内容は、『中将姫』『石童丸』などの仏教関連に限らず、『国定忠治』『鈴木主水』『おさん茂兵衛』などの時事物、心中物など民間の話も多い。

富山県南砺市の「ちょんがれ節系」『目蓮尊者地獄巡り』（以下、「ちょんがれ目蓮」と簡写）の冒頭は、「そもそも勧請申し奉るに…」で語りはじめる⁵⁾。この「勧請」とは釈迦の仏伝にいう、本来、釈尊を招いて仏法を説いてもらう意味だから、唱導師が釈迦になり代わって唱導することなのである。それ故、この踊口説は本来、和讃同様に唱導行為であった。

「ちょんがれ目蓮」は既述の後に、「千部施餓鬼のさてその由来、広め奉る。よくもつらつら尋ねてみるに」と、施餓鬼の由来を語るのに対して、金沢の「じょうかべ節系」『目蓮尊者地獄巡り』（以下、「じょうかべ目蓮」と簡写）の語り出しは、「(大和国) 壺坂寺の如意輪観音の御伝記を、詳しく尋ね奉るに」となっている。いずれも説経節によくある「本地物」に

属す。すなわち、物事の本源（施餓鬼）や、衆生済度のために現れた仏・菩薩（如意輪観音）などの由来話を説き明かすものである。例えば、『浄瑠璃御前物語』の「本地をくわしく尋るに」、『ほり江巻双紙』では「由来を詳しく尋ぬるに」、『をぐり』は「そもそもこの物語の由来を詳しく尋ぬるに」、『かるかや』は「地蔵の御本地を、詳しく説きたて広め申に」、『さんせう大夫』は「御本地を詳しく尋ね奉るに」『まつら長者』も「弁財天の由来を、詳しく尋ね申すに」としているから、口説は説経節の冒頭の慣用的語り出しを踏襲しているといえるのである。

因みに、日本人は古来「目連」の二字を、往々「目蓮」と書く。蓮の花は、仏教の象徴的花だからだ。そこで、拙稿では、日本に関する場合、「目蓮」という字を使うことにする。また、以下に挙げた詞章本文は本来片仮名のものもあり、旧仮名遣いで、漢字も宛字が少なからずあるので、新仮名遣いと平仮名に統一し、本文を太字で示した。なお、論述の後の＊以下は注釈である。

§1 『盂蘭盆経和讃』

この和讃は、東漸院の久米原心隆の作とされている⁶⁾。目連説話の縁起は『仏説盂蘭盆経』（以下、『経文』と簡写）にあるので、まずそれを踏まえたこの和讃を見てみよう。詞型は三（四）言・四（三）言（七言）・五言を、基調としている。

帰命頂礼盂蘭盆経 今その功德を和解^{わけ}すれば 盂蘭は梵土の言葉にて
これは倒^{さかさ}に懸けられて 苦しむという義理となる 地獄餓鬼趣の姿なり

この「倒に懸けられて」は、7世紀中葉の玄奘撰『一切経音義』（一三）に、盂蘭盆について梵語の ullambana を「盂蘭盆」、あるいは「烏藍婆

拏」と音写し、「倒懸」と漢訳したのをうけたものとあり、8世紀半ばの宗密『孟蘭盆経疏』などにも、引用されている。因みに、「倒懸」なる語は『孟子・公孫丑上』にあって、仁政を行えば、民は悦こんで、「なお倒懸を解かれたごとし」とある。「地獄」という言葉は本来『経文』にはなく、「餓鬼趣」とだけある。生前の行いによって「趣く」地獄・餓鬼・畜生・修羅・人・天の六道のうち、前三者を「三悪趣（三悪道）」という。『経文』には、「地獄」は出ないが、後世の目連物では、目連の地獄巡りが有名になる。恐らく、慳貪我欲の転生するところは、「餓鬼道」だという観念があったのが、六朝時代に「浄土」信仰が弘布したのに並行して、「地獄」の世界も複雑化し発展したからだろう。

*「帰命頂礼」自分の額を釈尊の足につけて、身命を投げ出して仏の教えに従う拝礼をすること。

釈尊在世のそのむかし 御弟子の目蓮大尊者 ^{ろくじんつう} 六神通を得にしかば
父母の大恩報ぜんと 普く世界を見給うに 尊者の母親青提女

『経文』には「六神通」を「六通」とし、目連がそれを「得」たことは餓鬼道に母を尋ね、釈尊の処へ飛来したり、地獄遍歴を可能にした前提となっている。『経文』では、「父母の乳哺の恩に報い」とあって、「乳哺の恩」に「父」を加えており、「父母の大恩」としている。このことは、『経文』からの観念で、父系氏族社会の「先祖崇拜」と「親孝行」の双方に向かう（前掲岩本裕氏の論著では後世に附加したとする）が、この和讃では本来の母の救済に重点がおかれ、父の影は薄い。また、目連は本来、インド人なのだが、中国では「目乾連」、「目連」と漢字で簡写され、次第に中国人化する。『経文』に目連以外の人名はなく、目連の俗名「羅卜」と母の名「清提」は、唐初の『浄土孟蘭盆経』に現れる。「清提」は「青提」、中国化が進んだ宋代には「劉青提」と、中国的姓が冠せられる。日本では「靖提女」とも書かれ、^{じょうだい ぶにん}青提夫人と発音されて

いた。

*「六神通」は、「神足通（飛行・変身の能力）」・「天眼通（衆生の転生を知る）」・「天耳通（全ての音を聞く）」・「他心通（他人の考えを知る）」・「宿命通（過去世の状態を知る）」・「漏尽通（自己の煩惱が尽きたことを知る）」、以上の自由自在な能力のこと。

世にありしとき慳貪 ^{けんどん} の	業にて餓鬼に生れたり	牛頭馬頭常に附添 ^{こずめず} いて
暫 ^{しば} しも呵責を免れず	飲食 ^{おんじき} さらに得られねば	飢渴 ^{きかつ} に迫りて瘦ほそり
咽喉 ^{のど} は針より細くして	腹は太鼓の如くなり	而も餓鬼 ^{がきしゅ} 趣 ^{あり} に有とある
苦悩 ^{のこら} を残ず受け給う		

既述のとおり『経文』には母が「餓鬼道」に転生したというものの、その具体的な罪業はない。ただ、「左手をもって鉢を障ぎ」と他の餓鬼に奪われまいとした浅ましさを、後に母の主要な罪業「慳貪」として展開させる。餓鬼道の母の姿は「皮骨連なり立つ（皮と骨になっていた）」とあるに過ぎない。牛頭馬頭の呵責や、餓鬼の「咽喉は針より細くて、腹は太鼓の如くなり」なる表現は、後世の『大目乾連冥間救母変文』（以下、『冥間変文』と簡写）に「咽は針孔の如く滴水も通らず」と表れ、日本では源信の『往生要集』第一章第二「餓鬼」（984）にも引かれている。この餓鬼の描写の典型的表現なども、『経文』にはない。

尊者見るより驚嘆し	いそぎて飯を鉢に盛り	泣く泣く母に供せしに
鉢 ^{くわ} 取り食んとし給えば	忽ち火焰と変じつつ	却って苦悩を増し給う

『経文』では、他の餓鬼が取りに来るのを手で遮ったというすぐ後に「火炭に成り」として、母の「慳貪」の罪業に対する罰を「食、未だ口に入らざるに化して火炭と成り、遂に食することを得ず」としている場面、で、「火炭」をここでは「火焰と変じ」たとする。これでは食せないから、目蓮は「苦悩を増し」たのである。この「火焰と変じ」るモチー

フは、後に強い印象として受けつがれ、前掲の『冥間変文』に「たとえ美食香餐を得るも、すなわち化して猛火となる」、『目連縁起』では「香飯は餐^たべんと欲するに^た変じて猛火となる」と述べられている⁷⁾。ここで、猛火が『経文』の「火炭」より来ていることを知るが、餓鬼が「咽喉は針より細くして」なら、それだけで食べられないので、蛇足にも覚える。ならば、「猛火」は目連の母に特有で、「咽喉は針より細くして」は、餓鬼一般的表現と考えられる。それが継承され、唐代の不空訳『仏説救拔焰口餓鬼陀羅尼經』に、阿難尊者が禪定中に、「焰口^{えんく}（面然^{めんねん}）」なる餓鬼が現れ、「三日後に、汝は自分のような餓鬼になるだろう」と告げた。そこで、阿難が免れる法を問うと、施餓鬼供養をするようにといわれ、それに従って営むと救われたとある⁸⁾。施餓鬼は、9世紀日本に空海など入唐僧たちが将来して、鎌倉時代に各宗派に取り入れられ、室町時代に盂蘭盆と結びついたとされる。室町期に淵源があるといわれる説経節『目連記』（1660年頃刊）の末尾に「母夫人に限らず、一切の衆生、その他鳥類、畜類に到るまで、みなみな極楽の縁となりぬれば、施餓鬼と言う事、この御代より始まれり」とある⁹⁾。ここで注目すべきは、自らの親族・祖先を救済する狭い先祖救済（追善）の観念ではなく、施餓鬼が広く無縁仏の霊を救済する大乘の理念に重点がおかれている点である。盂蘭盆会が後に中国では施餓鬼の「瑜伽焰口^{ゆがえんく}」法会となる。

尊者号泣し給えど　救わん方便^{てだて}さらになし　因^{ぐちん}って如来に具陳して
慈悲請^{つげ}い給え告給う　汝が母は罪深し　一人の力及ぶまじ
七月十五自恣^{じしにち}日に　百味の飲食^{おんじき}整えて　十方衆僧を供養せよ
その威力^{いりき}にて免がれん

『経文』どおり、母が「鉢飯」を食せないことを目の当たりにして、目連は「大叫悲號、涕泣」したとある。ここでも、「尊者号泣し」ている。

敦煌変文の中にも受けつがれただけでなく、「神通第一」なのに、日本でも目連説話の目連はよく泣き、その泣く表現も様々である。母の無残な姿、浅ましい行状などに、感情の発露は「泣く」行為で表されるのである。具に陳べる「具陳」は『経文』の文言を引くが、「仏」を「如来」に替えている（施餓鬼会では、多宝如来以下、四あるいは七如来を将来する）。『経文』に、母の罪業は「罪根深結なれば、汝一人の力の奈何ともする所に非ず」と、母の罪業の深さを強調すると同時に、六神通を得た目連でさえ、一人では救済できぬと、仏教の衆僧の威力が優ることを力説する。『経文』には、加えて「汝、孝順の声をもて天地を動かすとも、雖も、…奈何ともすること能わず」というなかに、「孝順」という理念が挟みこまれたことは、『経文』の後半で大きな意味を持つ。また、今日では知る人も少ないが、なぜお盆が8月15日にされているかの根拠が、ここに示されている。古代インドで、3か月の雨期（旧暦4月15日～7月15日）に僧侶が一か所にこもって修行に専念した。これを「夏安吾^け」と称し、最終日の旧暦7月15日に、自己の反省をし、懺悔した後、解放される。これを「自恣日」という。この修行僧が解放される日に、僧侶に供養するようと教えているのである。

尊者教えを受け給い 百味の飲食五菓などの 甘味を盆に盛り供え
 自恣の衆僧を供養せり その功德にて母君は 餓鬼趣を出でて天人^{てんにん}の
 姿になりて来給いつ 余の餓鬼までも解脱せり

『経文』では、生活用具も上がっているが、ここでは、「飯百味」と「五菓」の食物のみである。日本の『熊野十界曼荼羅』や後述の絵相を見ると、香油や盆器などの器物は見られず、高く盛られた飯碗などが並んでいる。『もくれんのさうし』には、「仏説の如く七月十五日に高き床^{とこ}を描き、百味の飲食を調べ、万灯会を点し、三世の諸仏を招じ、過去七世の

父母に手向け給う。十方の僧を供養し給いて、かの夫人の出離生死・頓証菩提を祈り給いしかば、いよいよ母君無上の覺位に登り給いける。…孟蘭盆と名づけ、今に絶えず、七世の父母ないし一切衆生を弔い、天竺より事起りぬ。震旦、韓朝・本朝に至るまで、これを用いる」と述べる。ここに「天竺より事起りぬ」とあるが、インドに孟蘭盆会を催した形跡は見られない（唐代初期に西域からインドを遍歴した玄奘の『大唐西域記』にも孟蘭盆の頃の記述に全く言及されていない）。だが、儒教を尊崇した朝鮮王朝期の『孟蘭盆經說相図』が松阪の朝田寺や大津の西教寺などに遺っていて、朝鮮の孟蘭盆会（施餓鬼）の供養の盆檀の様子を知ることができる¹⁰⁾。孟蘭盆会は本来その功德として、母を救済することにあつたはずだ。それが、『經文』では「目連の母、即ちこの日において、一劫の餓鬼の苦を脱るを得たり」とあるに止まり、母が「**天人の姿になりて来給いつ**」とは述べていない。敦煌變文の『目連緣起』は、母が「天上に生まれる」「天堂に上るを得たり」、上掲『冥間變文』でも、「天女の来迎し接えるを得て、一に往きて忉利天に迎えられて快樂を受ける」と、天女たちに「忉利天に迎え入れられた」とあり、南宋の『目連救母經』（注1の②）では、後者を踏襲している。

*「五菓」とは、1が棗・杏、2が梨・李、3が椰子・胡桃・石榴、4が松の実の類、5が大小の豆という。「忉利天」は、須弥山の頂上にある。『今昔物語』に摩耶夫人が忉利天に転生したとある。

さればわれらが父母や 七世の父母に六親が 現世福樂未來世は
 三途の苦をば免がれん これこの經の功德にて いまの**盆供**の起原なり
 孝行思わん人々は 年々必ず修し給え

じつは『經文』自体が孝順と祖先崇拜の儒教徳目を強調して、孟蘭盆会は「七世の父母、および現在の父母厄難中の者、…六種の親属（父母弟妹姉妹）、三途（畜生道・餓鬼道・地獄の三惡処）の苦を出ることを得

て、…もし父母現在せば、福樂百年、あるいは七世の父母も天に生じ、…無量の快樂を受けん」とある文言を踏襲して、先祖を敬い救済することが、この盂蘭盆法会を営むことであると強調して結ぶ。そこで、母の救済説話は本筋から離脱し、「七世の父母も天に生じ」るなかに、暗に包みこまれているようである。上掲2種の敦煌変文ともに、「孝」を説き、他の和讃の多くも、孝順並びに祖先・親族の救済に盂蘭盆会の趣旨が大きく傾斜してしまうのに対して、この『盂蘭盆経和讃』の大部分は、『経文』とも異なっている。目連の母の悪業とその報い、そして「救母」に主眼がおかれている点に特徴がある。

§2 施餓鬼和讃¹¹⁾

施餓鬼供養は、既述のごとく、おそらく室町期から目連説話を縁起とする盂蘭盆と結びつき、この和讃でも、目連救母の話から解き明かす。餓鬼道に堕ちた母に、目連が食べさせに行ったことで、「餓鬼に施す」という共通点ができ、二者は結合した。その和讃の詞型は七五調で、この七言は四言／三言もあれば、三言／四言もある。作詞者の牧玄道（嘉永2年～大正2年）は明治期に活躍した曹洞宗の僧侶であった。その筆致は、冗漫に流れず、さりげなく引喩・暗喩を施すなど、筆が立つ人の作と思われる。

施餓鬼の由来を尋ねれば 目連菩薩の母君の ^{のが} 避け方なき罪により
それ餓鬼道におち給う^{たち}

この冒頭「施餓鬼の由来を尋ねれば」は、前掲の「ちよんがれ目蓮」の「千部施餓鬼のさてその由来、広め奉る。よくもつらつら尋ねてみるに」や、金沢の「じょうかべ目蓮」の「(大和の国の) 壺坂寺の如意輪観音の御伝記を、詳しく尋ね奉るに」に類する踊口説の形式を踏まえている

ことを知る。

見るに忍びずその苦患　慳貪邪見の報いにて　餓鬼に墮れば飲食を
 目に見て前にありながら　食することも叶ずに　皆これ火焰と成果つる
 恩愛深き母君の　傷しいかな哀しいかな

『経文』から離れ、「火焰と成」というモチーフは、既述のように、唐代の目連物には定着していた。まして、施餓鬼会が依拠した經典が「焰口」を主人公にしているのであるから。ここで注目しておきたい点は、初めの部分で、「恩愛深き母君の」と父系の孝の觀念が希薄であることだ。

餓鬼の悩みを受け給う　いかなる善を行うて　救ひあげんと思惟せり
 急ぎ如来のもとに行き　衣の袖をしぼりつゝ　願ひ給えば有り難や
 大慈大悲のみ心に　智慧柔軟のおん言葉

救母の法を「善を行うて」と単に法会を営むに限定せず、善業とした点は、仏教の功德を積むという理念を表していて警拔な処である。「衣の袖をしぼりつゝ」は既述の「泣く目連」のイメージの表現だが、説経節が多用する「涙」の一字を用いていない。「柔軟」は仏が具えている「八音」（後述）のうちの「柔軟音」で、慈愛に満ちた穏やかな声のことである。

「これこれ目連聴き給え　須弥より重き餓鬼の罪　やすやす逃る事も
 なし　大衆威仁の力にて　自恣の其日を待れよ」と　待ちて数多の
 菩薩たち　精勤歡喜の供養せば　父母のみか現在の　危難究苦の
 ものまでも　みなこれ生天極楽ぞ　世間の孝は一身のみ
 この法修行の孝行は　七世の父母の為となる

ここでは、『経文』の孟蘭盆会が「世間の孝」で、「一身のみ」の孝順に止まるのに対して、この和讃での施餓鬼会は「危難究苦のものまでも」と、無縁仏や餓鬼をも包括して供養する点で大きな差異がある。そして、このあたりから、『経文』の「この法修行の孝行は、七世の父母の為となる」と、『仏説父母恩重経』（阿難との対話の形式を取っているが、中国唐代初期に作られた偽経。異本が数種ある）に見える、「父系の孝」という祖先崇拜の徳目のようだが、じつは大いに趣を異にしている。

親の慈愛を受けしぬ者 誰かはもってあるべきぞ 暑さ寒さもなきよ
うと 我身を賣て子をかこい 夜は懷昼は膝 乳房含めて摩頂^{まちょう}せり
ひいきの余り腹たて 人に諂曲^{へつらい}はかりごと 名聞利慾^{みようもん}に商うも
鋤耕^{おい}しや笈担い 朝夕山河に交わりて 蹄を殺し漁^{すな}れり

みなこれ罪と知りながら 妻子の命を養うと 思いになせる罪科を

この段に入って、親は自己犠牲をして、子に慈愛を「摩頂（至れり尽く）せり」と注ぎ、また妻子のために働らき生活するなかで、知らずにやむを得ず罪科を重ねる。日本では浄土真宗に際立っているが、人間には「生きる者の避けられない罪」を犯しているという観念が、ここに反映されているようである。

現在その子に生まれては 親を思いの法^{のり}のみち 飲食種々の衣服^{えぶく}まで
富せたりとも孝ならず 善なき親に善根を 信施戒定知恵を増し
これぞ誠の孝行ぞ 左の方には父上を 右の方には母上を
負うて苦勞を尽すとも 報ゆるに足らぬ大恩を 各々親しく報ゆべし
我も報わず子孫また 代々報い報ぜねば ついに家財を失うて
餓鬼畜生の墮つるなり 天理を知らぬ誤りぞ

親となって、物質的に自分の親に衣食の面で富ませても、それは孝とは

いえないと、以下本筋の仏教的「誠の孝行」、すなわち「出家に布施をし戒を守り、仏教の悟りの知恵を増す」ことを説く。ここがこの『施餓鬼和讃』の主眼で、この「誠の孝行」をしなければ、それは報恩にはならず、子孫代々報われない。結果として、「家財を失うて、餓鬼畜生の墮つる」となる。ここには、儒教の徳目とは全く異なる「孝行」の概念が提示され、仏教の因果の観念が色濃く反映されているのである。

目連如来の記を受けて 教えのごとく行えば 母もろともに残りなし
餓鬼もろもろの悪道を みな速やかに消滅す かく有り難き^{みのり}御法をば
いかで容易く思うらん

「母もろともに残りなし、餓鬼もろもろの悪道を、みな速やかに消滅す」とあるように、法会を営めば母の堕ちている餓鬼から、畜生趣・地獄の三悪趣みな消滅するのだから、御法を軽んじてはいけなさと、母のみを救済するのではないのが、この「施餓鬼会」の趣旨なのである。

*「記を受けて」即ち「受記」とは、釈迦如来が未来その人が成仏すると預言すること。

恩ある親もわれもみな 可愛^{かわゆ}き人も恋しきも ただ朝顔の花の露
^{いず}後れ先立つ道なれば 昨日見し人今日はなし 立つは烟の暮れの空
涙とともに入り相に 鐘を聞くにも悲しけれ 生^{しょうじ}死無常のことわりぞ
千歳の松も朽つる世に 千万年も生きいと 思う心の慾心に
あらゆる罪を作るなり 心留めじな仮の宿 たとい心の儘なるも
一つ叶えば二つかけ あるにつけても愁あり なきにつけても憂苦あり
り げに三界は火宅なり

ここに、目蓮の母の我欲にこと寄せて、この無常の世の欲心が尽きることなく罪を作ることを説く。心のままに欲が「一つ叶」うと次の欲が生じる。物を持っても、持たなくても憂える。無常の世界にありながら、

それを悟らず、「三界は火宅なり」と欲界などに住む人間というものを、輪廻する苦しみにある存在との仏教的観念を述べている。

* 「入り相に、鐘を聞く」とは、晩鐘の音を聞いて悲しみの気持ちが湧いてくること。

速くその地を出で来り 涼き御法に会えかしと 真実深きみ仏の
慈悲を思えよ疑ふな 夙に起ては夜半居寝て 忠と孝とを努むれば
人は知らねど天は知る 怠るときには衣食^{えじき}とも 具わりながら供^{そなわ}らず
飽くほどくらい暖^{あたたか}に 着なば安しと思えども 三毒五常を思わずに
得ざる得^{ふみちが}りと踏違え 後の患^{うれい}をいかにせん 我慢つたなく誹るとも
命をはらん自分には 外に頼みはあるまいぞ 南无や仏という声を
聞けば悩みも忘れけり かれを思うてこれに聞き 惜しむ心の憂い惑い
離れ施^{じょう}す浄味^{みじき}食 あらゆる国土一切の 餓鬼^{せんもう}先亡諸鬼神ら
神呪^{じんしゆ}加持に飽満し その善悦の福報は 行^{てん}う人の身^げに答^{ほっかい}え
災の雲打ち払い 世々の寿窮^{りやく}まらず 天下法界同利益

欲に駆られた「火宅」から速く離れれば、「涼しき御法に会え」よう、
そうして「み仏のお慈悲」を信じよという。その後には、忠孝や五常と
いった儒教道徳も重ねて、尽きることのない我欲を戒めている。執着し
た物がうまく手に入らないと他人を誹っても仕方がない。自分が頼れる
のは仏だけで、その声を聞けば、悩みも忘れてしまう。物惜しみを
する心の憂いや惑いがあったら、美味な食物を布施せよ。あらゆる「餓鬼・
亡霊・諸鬼神ら」に、真言を唱え祈禱して供えれば、福報はそれを行う
人に戻ってくる。災いの雲が晴れて、代々の寿命は極まりない。こう施
餓鬼の功德を述べて、「天下法界（万物）」は、「利益」をとともにすると、
結ばれている。この和讃の後半は物質的無常の認識と寡欲、そして布施、
さらには「餓鬼先亡諸鬼神ら」「天下法界」を供養するという、仏法の
趣旨で結ばれている点が大きな特徴となっている。

*「三毒」は、衆生の善心を損なう3種の煩惱で、貪欲（むさぼり）・瞋恚（いかり）・愚痴（仏法に対する無知）、「五常」は、儒教の徳目で「仁・義・礼・智・信（真心）」をいう。

§3 目蓮の讃（和讃）¹²⁾

抑も目蓮尊者殿　目蓮ほどの子を持ちて　よい寺　よい経　よい衣
 これがな我子の目蓮に　くれたさばやと願いつつ　願積もりて山となる
 ママ霧が積もりて咎となり　尊者は地獄に落ち給う

この和讃で、「目蓮尊者」「尊者」とは、目蓮の母のことである。なぜ母を「尊者」としているのかは未詳。内容は母がわが子可愛さのあまり、我欲に走ることを述べている。上記「ちょんがれ目蓮」にも、「僧の着たれし衣や御袈裟を、眺めて見ては、あんな奇麗な衣や袈裟を、こちらの目蓮尊者に着せて、しさいぶらせて眺めて見たい。欲しい欲しいが積みかさな重りて、沙々もより集れば、千尋薙ぎ立つ大盤石よ、糸を集めて大綱出来る」（注1の⑦）とある。また、すべてわが子目蓮への愛情がため、母が餓鬼道に堕ちたのだから、悪いのは目連の方で、母殺しの「五逆の罪」を犯しているのだという。これは、金春禅竹の作と伝えられる、謡曲『目蓮』（天理図書館蔵 下村本）前場で、三途の姥の台詞に「痛わしや目蓮の母、尊者を思う罪により。無間に落て浮む期なし。然ば目蓮は五逆の罪人たり」の文言として表れている。母の子を思う過度の執着が我欲を起こさせ、そのために母は墮獄したから、目蓮が「五逆」の罪を犯したと非難している観念に、通じるようにも思われる。

*「五逆」とは、父・母・聖者を殺すこと、仏を傷つけること、教団の結束を破壊することである。

目蓮此由聞召し　地獄探し致さんと　地獄の数は多けれど　一百三十六地獄
 探し見給い侍らえども　尊者は地獄にましまさず　地藏

菩薩を頼みつつ 無間の地獄を見てたべよ 三尺三寸の劔を持ち
 劔の先へと差上げて これがな目蓮尊者と 目蓮これを御覧じて
 尊者の代りとして 「吾をば地獄に落してたび給え」 目蓮地獄に落ち給う
 出家の体とて有難や 釜は極細破ごくさいして退き 九品浄土となし給う

目蓮は冥途の案内・地藏菩薩を頼りに、無間地獄を見ると、母は「三尺三寸の劔を持ち、劔の先へと差上げて」と、獄卒により劔先に刺されて差し上げられた。このモチーフは日本独自のものと思われるが、鎌倉時代には定着していて、その後、普遍的に広がった。¹³⁾「差上げて」いるのは獄卒で、この場面は多くの目蓮物や地獄図によく見られる絵相。一般的には『目連記』に「いたわしや母上は宝棒に指し貫かれて、上げらせ給う」とあるように、宝棒で後部から指し貫かれ、引き上げられている。あまりにも無残な母の姿に、母に代わって墮獄を願うが、地獄の責め苦は、他者が変わることは出来ないとする（敦煌変文にすでに見られる）。「出家の体とて有難や」は、同じく能楽『目蓮』に、「慈悲の心深く又は法華の知者成りにより、娑婆の姿を変えずして、冥途に來り給う」とあって、目蓮が地獄に來られた理由が述べられている。さらに、結びの「釜は極細破して退き」は、端的に地獄の釜は粉々になってなくなったと簡略化して述べられている。「九品浄土となし給う」は、「ちよんがれ目蓮」に、「そこで目蓮御經を出して、一に法華經、二に（浄土）三部經、汗を流して、読誦なさる。經の功德で一つの釜が、三つ九つ割れ離れれば、九品浄土へ一一響き、蓋はたちまち八つに割れて、蓮の蓮華と転じて開く」とあって、読經の功德で地獄の釜を打ち破り、浄土にしたということで、ここでも、あくまで母一人だけでなく、墮獄した全ての者を救済せんとする施餓鬼の理念がこめられている。この「九品浄土」は、各人が積んだ生前の功德によって九段階の往生・浄土があるとされるが、結局は地獄を阿弥陀の浄土に変えて、最下品のものでも救済

されるという大乘の理念を表している。

§4 目蓮尊者くどき¹⁴⁾。

されば七月十五日をば 盆と名づけて何処の里も 老いも若きも寄り
集まりて よいなよいなと踊りて遊ぶ これはいかなる訳かといえ
ばいとも尊きいわれがござる

ここに「これはいかなる訳かといえ」¹⁴⁾とあるのが、既述のように説経
節から受けついで「本地物」の語り出しである。

過ぎし昔に中天竺に 大聖釈尊御出生なされ 悉達太子と申せし時に
御年十九で無常を悟り 国も宝も位も捨てて 山に籠もりて御修行な
され 五六三十つで仏となりて 身には三十二相を具え または眉
間に光明放ち 四弁八音殊勝な声で 種々の御法を説き述べ給い
かかる尊き御仏なれば

目連物で、釈迦の徳は述べても、生い立ちから説くものは少ない。「三
十つで仏となりて」は、普通「大悟」を35歳としており、口説の語呂
のよさを採ったのだろう。「三十二相」は白毫など仏などに具わる優れ
た特徴を指すが、「ちょんがれ目蓮」には、目蓮は母生前の「浮き世姿
は三十二相」といい、その割注に「婦人の一切の美相」とあって、母の
容姿が敦煌変文以降、優れていたことを表した言葉に援用されている。

*「四弁」とは仏法、意義・言葉に精通し融通無碍に弁舌する能力で、「八音」とは如来の極好
音・柔軟音・和適音など、衆生を教化するのに8種の徳を具えている音声のこと。

常におそばを八万人ぞ 数^{だいしゆ}の大衆が附き添い給い それが内でも十六
弟子は 世にも名高き御僧ばかり とくに御徳の優れた羅漢 中に

目蓮尊者というは 神通第一名高き御弟子 時に目蓮御身の上を
心静かに考え給い 仏にしたがい教えを受けて かかる悟りを開くと
いうも

既述の同じ踊口説「ちょんがれ目蓮」の詞章に、「大聖釈迦牟尼如来、御弟子ばかりは、八万余人。…十六選び、これは即ち十六羅漢、三の御弟子は目蓮尊者。…目蓮尊者の由来、さてもつらつら尋ねてみれば、…」と、共通点を看取できる。この「踊口説」では、目蓮が成長して雄雌の親鳥が交代で卵を温めに来るのを見て、親の恩を感じ、父の居所、母の行方を「道眼」でなく、釈迦に尋ねると、母は父とは大違いで、八万地獄に堕ちたと告げられる。そこで目蓮は、幼年期に両親と死別して、親の恩に報いることができなかったので、亡き両親を尋ねるという話につながる。しかし、この『目蓮くどき』では、親の恩愛へと傾斜していくのである。

父と母との育てををかけ わけて母には十月の間 深き苦勞をかけた
る上に 生まれ出でては懷膝を 大小二便の不浄に汚し 乳に吸い
つき呑むその数は およそ一百八十余石 昼は終日夜はよもすがら
泣けど叫べど飽き厭いなく 不憫可愛の一念力ひねもすで 乳も吞ませて育て
てもらい 育てあげられ六根具足 たとい藻くずとなり給うとも
尋ね探して対面せんと 思う一念神通力で

「生まれ出でては懷膝を、大小二便の不浄に汚し」は前掲『施餓鬼和讃』の「夜は懷、昼は膝」に当たろうが、本源は『父母恩重經』の「不浄を洗濯し劬勞を憚らず」にあらう。この口説は、「目蓮のくどき」なので、父系の先祖崇拜に向かわず、孝の対象を母のみにしている点が、上記の和讃とは異なる。

*「六根具足」は視・聴・味・嗅・触・知の6種の能力が具わっていること。

初めて人中天上界の 広い間を尋ねてみても 母の行方が知られざる
 故に そこで目蓮三悪道を 尋ね給えばあら^{いたわ}勞しや 母は餓鬼道の
 苦患に沈み 食わず吞まず^{かお}体も面も 骨と皮とに瘦せ衰えて

この口説はやはり『経文』を踏襲し、「道眼」で畜生道・地獄・餓鬼道の「三悪道」を探して、ついに餓鬼道に母を見つける。その姿は『経文』の文言どおり、骨と皮になっていた。因みに、前掲『冥間変文』では、餓鬼道・地獄、さらに畜生道の犬と転生するが、それは明代の目連劇、鄭子珍撰『目連救母勸善戯文』（1582）にも受けつがれる。

*既述のとおり、六道の内の「餓鬼道」「畜生道」「地獄道」が「三悪道」。「三悪趣」ともいう。

苦痛ましますその有様を 一目見るより目蓮尊者 肝も心も消え入る
 ばかり 「さても母様お^{いたわ}勞しや」 「そなた我が子かやれ嬉や」と
 親子手を取り面見合わせて 嬉し涙に咽せ入り給い 「親は子という
 て尋ねもするが 親と尋ねるその子は稀な」 たれも世を知る歌さえ
 あるに

「親は子というて」以下は、じつは目蓮の孝行を暗示しているのであるが、上掲「ちょんがれ目蓮」の詞章にも、三途の姥や地獄の大王が、「親を尋ねて来る子もないが、子を尋ねて来る親もなし」と同類の文言を話す。ここに「たれも世を知る歌」とあり、当時流行していた文句なのであろう。この言葉の発話者は、餓鬼道で目蓮を迎えた者であろうか。この踊口説には、人物の対話が以下にもあり、現実感を添えていて、口説の特色を出している。

目蓮尊者は母御にこがれ 広い六道^{しょうじ}生死の内を 尋ね探して餓鬼道
 で会い 苦患ながめて長きに沈み 目蓮尊者は気を取りなおし 鉢
 を取り出しご飯を盛りて 「これを上げれ」と施し給い そこで母御

のいわれるようは 「これは嬉しや御飯であるか」 鉢を手に取り押し
頂いて

目蓮は、「母御にこがれ、広い六道生死の内を、尋ね探して」、ようやく
出会ったのに、苦患で無残となった母の姿に茫然となる。だが、「氣を
取りなおし」て「ご飯を盛りて」差し出すと、母は有難く「鉢を手に取
り押し頂いて」と感謝の気持ちがあふれていた。これは、『經文』の他
の餓鬼に奪われまいとする強欲な母とは全く違う様相で、ここが、他の
目連物とは異なり、一種の妙味すら覚える。ただ、尊者の母御を全くの
極悪人としない意識も、目連物には存在していた。

すぐに食わんとし給いければ じきに火焰と燃え上がる それを見る
より目蓮尊者 はっと驚き大地に伏して 泣き叫んず狂気のごとく
いかに業力不思議といえど 飯が^{みょうか}猛火と燃え上がるとは さては我
が身の神通力で とても母君救われませぬ 巡り逢ったるその甲斐も
なく 名残惜しやと母御に別れ 急ぎ仏の身許に帰り

せっかくのご飯が「火焰と燃え上がる」のだから、釈尊の処へ戻り教え
を請うというのは決まった筋立てだが、『經文』の深く根を張った罪と
は言わず、いささか離れて、悪の「業力」で「猛火」となったとしてい
る。

右のありまま詳しく述べて 仏を礼拝両手を合わせ 「哀れ大聖釈迦
牟尼世尊 母の苦患を助かる御法 教え給え」と願われければ 仏
は柔軟^{にゅうなん}大悲のお顔 にこりと笑うて宣う^{のたま}ようは 「されば目蓮汝が母は
三宝供養お功德は積^つまで 五障三従障りの深い 邪見慳貪欲惡心の
深き罪業絆に引かれ 餓鬼に沈んでの苦患 とても汝が神通力で
餓鬼の苦患は救われませぬ 汝よく聴けよ自念せよ

この「哀れ」は「ぜひともし」の意。「五障三従障り」は、女が仏などになれない「五障」と父・夫・子に従う「三従」のことで、仏教性差別の例としてよくあげられる言葉。『法華経』『提婆達多品』に龍女が、女身のままでは直接成仏できないので、「變成男子」（男に生まれ変わって成仏）という観念が新たに示され、本来資格のない女性も成仏可能と認めたことで、『法華経』は尊崇されていた。だが、わが国では、蓮如の『御ふみ』に「五障・三従の女人までも、みなたすけたまえる、不思議の誓願ぞ」と、各所に女人成仏を言明しているのである。日本の浄土宗には女人成仏を否定しない流れがあった。じつは目連物では、抑も『経文』以来、目連の母は女人のまま天堂（忉利天）に入り、踊り口説「ちょうんがれ目蓮」も、女身のまま「成仏」が達成されている。母は女人の上に加えて、「邪見慳貪欲恶心」の極重の悪人だから、目連に神通力があっても救えないのに、『経文』でも、衆僧の力で、女人のまま天に転生されている。これも、目連仏教説話の際だった特徴と思われる。

母を助ける謂れを説かん　　されば七月十五日をば　　^{じし}自恣と名付けて大事な日柄　　この日数多の大衆を集め　　^{ぼんじき}盆に百味の飯食等を　　もって尊重供養をなせば　　餓鬼の苦患は免るべし」と　　教え給えば目蓮尊者踊り歡喜の眉うち開き　　大聖世尊の教えにまかせ　　衆僧自恣の日数多の僧に　　供養し給う功德の力　　一つは大衆の威力によりて　　餓鬼の苦患を免れたもう　　そこで目蓮大聖とともに　　声を引き立て手を打ちたたき　　踊りあがりて喜び給い　　これが踊りの初めてなりて

釈尊の教えどおり「七月十五日」の「自恣の日」に盆の供養を営むと、「餓鬼の苦患を免れた」ので、目蓮も「踊りあがりて喜び給い　これが踊りの初めてなり」と、盆踊りの由来を述べる。上記「ちょうんがれ目蓮」にも「釜の中なる罪人共も、…一人一人が蓮の葉かむり、釜のめぐ

りをおっ取り回し、両手叩いて、左の方へ、ぐるりぐると三遍まわり、これがこの世の踊りの初め」を簡略化したように見える。但し、「ちょうながれ目蓮」の方は、救われた餓鬼が踊るので、目蓮が踊るのではない。

末に今まで七月を 盆と名付けて踊って遊ぶ 踊る人数も邪険な衆も
心静かによく聴き給え 三世因果も親孝行も 今の口説が良きその手本
我が身我が身の鏡とまもり 後生大事と心に掛けて 厚く三宝尊^{そんぎょう}敬
いたし 上のご恩は忘れぬように 親に孝行主人に忠義 下を憐れ
み不憫をくわえ 世間仏法車の両輪 一つ欠けてもならぬと思い
ともに大事と嗜むなれば 功德利益は現当二世に 蒙る事のあら有難や
最後に「邪険な衆」（仏法を軽んじる輩）相手に、この踊口説を「手本」とするように勧めている。仏法の「三世因果」「後生大事と心に掛けて、厚く三宝尊敬いたし」と、同時に儒教徳目の「親に孝行、主人に忠義」を加えた。後者の「世間」と「仏法」を「車の両輪」とし、「ともに大事と嗜む（心して励む）なれば、功德利益は現当（現世と来世）二世に、蒙る事のあら有難や」と結んでいるのである。

§5 盆踊り施餓鬼口説¹⁵⁾

盂蘭盆の縁起を知る人も少ない今日では、現行の北陸地方の『目蓮尊者地獄巡り』のような盆踊りに目蓮説話を語る物は珍しくなった。隠岐のこの踊口説がまだ唄われているかは未詳だが、ここに参考として挙げておきたい。詞型は踊口説によくある三・四／四・三の七言体が基本である。

盆がヨー来たきた用意は出来た さぞや仏も旅立つ仕度 盆はヨーうれしやあの世の人が 晴れて此の世に逢いに来る 待ちにヨーまたれ

た此の坊さんは 仏の来る日を出迎えしましょ 仏壇ヨー飾りの花提
 灯や お供物のその数点は お花やヨー団子や果物混て お菓子に
 ソウメン カンピョウの香り ナスビやヨースイカと モモ梨リング
 盆の七日は七夕祭り お墓のヨー掃除もキレイに出来た 墓場の燈
 灯ろう(ママ)もあかあかと お寺のヨー坊さん檀家をまわり 親族縁者もつとめ
 の往来いきき み霊たまにヨー廻向の心を捧げ 芋おがらを焚いて迎い火を 煙
 ヨー乗りて来る吾家の仏 お盆の祠りをいたしましょう

ここまでは、先祖の御霊を迎えるお盆の様子、盆棚の供物について述べる。なお、「燈灯」は「燈籠」の誤りと思われる。つぎに釈尊の徳におよぶ。

三千ヨー年の昔のことよ 印度の国にお釈迦さま 生れヨーなされて
 苦難の修行 苦しむ衆生を助けんものと 願いのヨーまに悟り仏
 釈迦牟尼仏のまことの教え 老もヨー若きも愚な者も 喜ぶ衆生はそ
 の数知れぬ あまたヨー御弟子のその中に 智恵第一の目蓮尊者
 羅漢のヨーさとりを開かれて 神通力をあらわしまして 六道のヨー
 辻を見られし時に 冥土に行きます吾母様は 骨とヨー皮に身はやつれ
 釈尊を称赞して、いよいよ目蓮尊者の話になるが、内容はほぼ『経文』
 を踏まえている。ただ、御弟子の中で「智恵第一」は目連でなく、とも
 に釈迦に帰依した舍利弗の誤りで、目連の方は「神通第一」と称された。
 その神通力の道眼で「六道」の内、餓鬼道に骨と皮になっている母を見
 出せたのである。

身の毛もよだつ餓鬼道の中に 落ちてヨー焰に口を焼き 見るも労わ
 し哀れな姿 苦難のヨーさまに驚きはてて 急ぎて母御の御前に進み
 救いヨー出さんとちんしょく供養 真心こめてお進めなさる 恨みと

ヨー悩みの苦しさばかり ^{まなこ}眼をいからせ言葉も荒く 「そなたをヨー
 育てしその時に 罪を作りし因果は報ゆ かかるヨー攻め苦も其方^{そなた}が
 ためぞ 見るも憎らし目連ぞよ」と 早くヨー此場を立ち去り行けば
 亡者の姿は消えてゆく 尊者のヨー嘆きいかばかり 力も尽きて思案
 の揚句 詮方ヨーなくて立ち帰られる

他の目連物では、『経文』を受けて母に食物を与えたところ、口元で「火炭（焰）」に変化するのに、このくどきでは、餓鬼道の母はすでに「焰に口を焼」かれているとしている。それが、「見るも勞わし哀れな姿」なのである。「真心こめて」供養しようとしたにもかかわらず、なんと母は「恨み」と「悩みの苦しさ」のあまり、「眼をいからせ言葉も荒く」責めたてている。そして、母の「亡者の姿は消えてゆく」と語る。これは、まったく他に見られない特異な内容である。つまり、母が餓鬼道に堕ちた理由を、「育てしその時に 罪を作りし因果」で、この「攻め苦も其方がためぞ、見るも憎らし目連ぞよ」と、供養に来た息子を逆恨みし、罵っているのである。上掲『目蓮和讃』や謡曲『目蓮』と同じ、目蓮可愛さのあまり罪を犯したという「五逆」の観念が基にあると思われるが、このように、母が自分を救済に来た息子目連を面罵することはない。ここで激しく息子を責め立てることで、「尊者のヨー嘆きいかばかり、力も尽きて思案の揚句、詮方ヨーなくて立ち帰られる」心情は、確かにわかりやすいが、上述のごとく、聖僧の母を極端に悪女に仕立てることに、歴代躊躇の念もあった。ここでは救いようのない悪態の母の形象を描くことで、それが目蓮の孝順と対比させる効果を発揮させているのである。釈尊の処へ「立ち帰られる」は、六神通の飛行能力を意味するのと同時に、それほどの神通力でも救済できず、釈尊の威力にすがらねばならぬことを暗示している。

釈迦如来に此の有様を　　涙ヨーながらにおはかりすれば　　しばしば言
葉もなかりし程に　　お釈迦ヨー如来の仰せを聞けば　　今日は七月十五
日夜のお盆　　あまたヨーお弟子の集いの日なり　　読経念佛供養のつとめ
御霊にヨー追善回向の功德　　天上世界に生まれて往きて　　永くヨー楽
しき幸せ者と　　聞くより胸に咲く蓮の花

目連の涙は、悲しみと苦しみ、加えてこの哀願の際にも流される。母の救済法を、釈尊が多くの目連物にあるような、目蓮の孝順さにほだされて、教えてくれたとは述べていない。上述の「親は子というて尋ねもするが、親と尋ねるその子は稀な」も、孝を暗示はしているが、強調はしていない。「七月十五日夜のお盆、あまたヨーお弟子の集いの日なり、読経念佛供養のつとめ、御霊にヨー追善回向の功德」によって、「天上世界に生まれて往」く教えを受けるというのが、ほぼ共通した筋立てで、盂蘭盆会の主眼が語られている。すなわち、儒教の孝道ではない、仏教の孝行「追善回向の功德」がここには明確に示されているのである。

尊者のヨー喜び如何ばかり　　教えのままに此の訳柄^{わけがら}を　　五百ヨー羅漢
に願いをかける　　仏果菩薩と回向をすれば　　餓鬼はヨー転じて大菩薩
仏と生れ極楽に　　目蓮ヨー尊者は嬉しさに　　二尺五寸の白地の木綿
五百ヨー羅漢に布施なさる　　受けし羅漢は喜びのあまり　　頭にヨー冠
りて踊りをおどる　　これがお盆の踊りの初め

目蓮は大勢の羅漢や菩薩と回向をすると、なんと餓鬼が大菩薩、仏に転生して極楽に。つまり餓鬼の母も転生したのである。嬉しさに、目蓮は羅漢たちに白地の木綿を送る（敬意を表わすチベットなどのハタと同じ意か）と、羅漢たちはそれを被って踊った。これが盆踊りの初めという。これは、上記の盆踊りの嚆矢とは別の説である。

いざやヨー諸人^{いわ}謂れを知りて 心に受けて先祖の仏 三界ヨー万霊祠
 りましよ 御恩報を心にかけて お盆のヨー祭りを懇ろに 地獄の
 釜も休むと聞けば こんなヨー嬉しいことはない 力に任せて踊りを
 しましょう 声のヨーかぎりに 歌いましょう 踊る体もその
 また声も 仏ヨー心が手足につくよ 仏見ている聞いている 冥土
 ヨーみやげになるばかりヨー

施餓鬼口説なので、「先祖の仏」だけでなく、「三界ヨー万霊祠りましよ」としている。また、「仏ヨー心が手足につくよ。仏見ている聞いている」は、ここでの仏は戻ってきた先祖の御霊で、その来臨を迎え入れていることを述べている。歌うことを前提とした措辞と、口語によっている処にも、踊口説の特色をよく表している。

むすび

以上、わが国に遺存している、目連説話に関する「和讃」と「口説」について若干の考察を試みた。説話の縁起は『仏説盂蘭盆経』であるが、その経典自体、餓鬼道に堕ちた母を救うことから端を発し、盂蘭盆という六道の悪趣で苦しんでいる祖先を救済する法を説くものであるから、儒教徳目の「孝」に容易に結びついた。儒教との融合で、盂蘭盆の法会は中国では、代々伝わった。後世には道教の「中元」も包括して、儒仏道合体となり、目連説話もますます弘布し発展した。ところが、梁武帝の「水陸法会」から、唐代に広く「法界（万物）」を救おうという「施餓鬼」という法会が出てきて、後に盂蘭盆に入れ替わり「瑜伽焰口」となる。それで、『盂蘭盆経』の目連説話は、施餓鬼にも結びつく。一方、日本でも先祖供養が盂蘭盆会となり、やはり施餓鬼会と結合するようになったのである。

目連説話の仕組みの要は、目連が「神通第一」なのに、自身の神通力で

は救母ができなかったことと、救われる対象が女性であることだ。悪趣に墮ちた亡者を、釈尊本人が救済すれば話はあまりに簡単である。そこで、釈迦の弟子の目連を主人公にすえた。なぜならば、彼は「神通第一」で、悪趣へ赴き、釈尊の処へ飛来する超能力を具えているからだ。その彼の神通力ですら救えない母を救済した点に、釈尊の偉大さが示されている。つぎに、父系の氏族社会であった中国において、先祖供養の話が父親を悪趣から救い出すというのでは、いかにもわかりやすい。それでは、「目連救母」のような発展は見られなかったろう。聖僧の母が極重の悪人であるということに、一番の意外性があり、話が広がる。それよりも悪業の女人であることが、仏教においては大きな意味があった。「悪業の母」の扱いも、濃淡様々である。息子に対する応対も差異があって、拙論にあげた和讃や口説にも、それが表われている。

上述のごとく、女性はそのままでは成仏できない。「変成男子」で男に生まれ変わらなければ成仏できないし、浄土には女人はいないと、仏教は女性を差別していたのである（日本の浄土宗、浄土真宗は男女差別を否定していたが）。『目蓮くどき』でも、女人には成仏できない五つの障り「五障」があるといっている。こうした性差別していた仏教にあって、目連救母の話は、一種破格の結末となっている。単なる女人ではなく、悪業を積んだ罪人という二重の不利を有しているのに、「変成男子」など一切せずに、そのまま天に転生するのである。

他方、目連救母説話は盂蘭盆の縁起でもあり、それに基づいて孝を推奨しているのは当然のことだが、儒教の孝道とは、根本的に異なる。仏教の先祖供養には三世の転生観念があって、『施餓鬼口説』には「追善廻向の功德」が明記され、『目蓮くどき』には「三世因果も親孝行も、…後生大事と心に掛けて、厚く三宝尊敬いたし」とあって、「三世」信仰に深く根ざしている点が鮮明に看取できる。こうした諸要素が融合しさらに敷衍さ

れて、和讃や口説に限っても、これほどの変異体が生まれた。このように、日本に遺存する目蓮物は、互いに影響し合い、先行の物を参考にしながら、独自の展開を見せ、各々の特色を発揮してきた。俗衆相手に、物語を工夫して興味深くし、さらに唱導として仏教の法理を巧みに盛り込んで、内容を豊かにしている。その唱導のなかでも、和讃と口説の韻文詞章は発声すると、その音調の快さを十分に味わうことができる。目で文字を追うのではなく、耳で聞くものなのである。

紙幅の関係で、『孟蘭盆経和讃』¹¹⁾、若葉のやま作『孟蘭盆和讃（おどり）』¹¹⁾などや、関連の『女人往生地獄和讃』¹⁶⁾等々には言及できなかった。これからは課題として、さらに資料踏査をし、研究を深めて参りたい。また、まだ遺存している資料は他にもあろう。拙稿の誤解も、ご教示戴ければ幸甚である。

2012年5月穀旦

注

- 1) 日本遺存資料に関する拙稿一覧。①「目連救母芸能初探」（『人文学研究所所報』（22）神奈川大学 1989/3）。②「関于在日本発現的元刊『仏説目連救母経』（『戯曲研究』（37）文化芸術出版社 1991）。③「鬼来迎二考」（『人文研究』（112）神奈川大学 1992/3）。④「日本孟蘭盆会舞歌中現存の目連故事」（『中華戯曲』（17）山西師範大学 1994）。⑤「チヨンガレ系目蓮盆踊唄初致」（『言語文化』（41）一橋大学 2004）。⑥「口寄せ語りの目連物について」（『言語文化』（42）一橋大学 2006）。⑦「南磧系本日蓮尊者盆踊唄詞章校異初稿」（『社会学研究』（44）一橋大学 2006）。⑧「わが国目蓮物への血盆経浸潤初探」（『人文学研究所所報』（61）神奈川大学 2019/3）。⑨「南磧系ちょんがれ目蓮盆踊り唄の詞章研究」（『人文研究所所報』（62）神奈川大学 2019/9）。
- 2) 川口久雄『桑島民謡集』（桑島民謡保存会 1975）石破洋『地獄絵と文学』（教育出版センター 1992）。
- 3) 武石彰夫編『仏教和讃御詠歌』（三）「経律論の部」（国書刊行会 1985）。
- 4) 菊岡沾涼『近代世事談』に貞享年間、京都の道念山三郎が盆の「踊口説」を始めたという。

- 5) (注1の⑨)『目蓮尊者地獄巡り』(嘉永5年の写本がある。(注1)の⑨「附記」に詞章掲載)。同名の踊口説は金沢にも「じょうかべ目蓮」として伝わっていて、こちらは明治時代から刊本がある)。
- 6) 武石彰夫編『仏教和讃御詠歌』(三)「経律論の部」所収(国書刊行会 1985)。
- 7) 千葉県匝瑳市光町の広済寺に伝わる現行のお盆の地獄芝居「鬼来迎」でも、女の亡者が食せんとするときに、火薬で仕組まれた焰が立ち上る場面がある。
- 8) 施餓鬼の典拠は唐代の実叉難陀訳『仏説救面然餓鬼陀羅尼神呪經』や不空訳『仏説救拔焰口餓鬼陀羅尼經』『瑜伽集焰口施食起教阿難陀緣由』など。
- 9) 横山重・藤原弘校訂『説経節正本集』(二)(大岡山書店 1937)。
- 10) 服部良男『施餓鬼図を読み解く』に詳しい(日本エディタースクール出版社 2000)。
- 11) 武石彰夫編牧玄道作詞『仏教和讃御詠歌』(三)「経律論の部」(国書刊行会 1985)。
- 12) 高野辰之編『日本歌謡集成』巻四「中古古今篇七捕逸」(春秋社 1932)。
- 13) 虎関師鍊『元亨釈書』(1322)に早くも言及されている。また、渡浩一「串刺の母」に詳しい(林雅彦編『生と死の図像学』第四章(至文堂 2003)。
- 14) 酒井董美『目蓮尊者くどき』について、『島根大学法文学部紀要 文学科編』(第19号—1) 1993/7に掲載されたもの。氏によれば、邑智郡羽須美村(現:邑南町)阿須那の旅迫に居住する斎藤秀夫氏所蔵の盆踊口説き文書の7種の口説の1種ということである。
- 15) 近藤武編『隠岐の民謡』(五)「盆唄」(隠岐民謡協会 1984)。
- 16) 高野辰之『日本歌謡集成』第四巻(東京堂 1942)。

附記

1988年、神奈川大学の中国語学科は創設された。私と大里浩秋氏が前年着任したときには、山口建治氏と鈴木陽一氏がすでにおられ、中国語学の佐藤進氏も加わり都合5人。さらに、尾上兼英(文学)、小島晋治(歴史)、那須清(語学)の諸先生、それに外国人特任教員の王廼珍をお迎えして、9人体制でスタートした。すでに、33年の年月が流れ、このたびの鈴木先生の退職で、創設メンバーはすべて去ることになった。鈴木先生は読書家で洋の東西を問わず博覧強記、また能弁でもある。そして、私がつとも強い印象を受けるのが、先生の江戸っ子気質とシャキシャキした江戸弁の響きである。話芸を嗜まれた名残であろう。また、ギターの弾き語

りと、じつに多彩な才能に恵まれておられる。思ったことを率直に話す。関西人のような裏のある話はされない。それがまた、反発を招くことがあったが、私のような関西人には、それが羨ましい。先生は、お話好きで話題が豊富、人気ゼミである。ゼミ生は食べ物を持参して、蘊蓄を夜まで聞き続けていた。先生は私の都立大学大学院の後輩にあたるが、面識は全くなかった。私が大学紛争と留学などあって正確には一年余りしか定期に出席しなかったのと違い、しっかりと学力をつけられた。そこで、分からないことがあると、すぐ先生にご教示を願い、いつも助けて戴いている。先生は美食家であるが、飲酒はされない。ハイライトの愛煙家であったが、心臓を病まれてからは、禁煙されている。中国語学科は、主に故人となられた尾上兼英、山口建治両先生に、鈴木先生が行政方面を牽引されてきた。関東の中国語学科としては、人材に恵まれた環境を維持されてきたのも、これら諸先生のご尽力が大きかったと思われる。鈴木先生、長い間、お疲れさま。いつまでも、お元気で、江戸っ子の気っ風を失わないでおられんことを。